風鐸

澁澤　均著

鐸風

澁澤均詩集

布田伸一君
大藤要先生
惠存

澁澤均

鐸風

溢澤均詩集

詩集

風鐸

澁澤　均著

序詩

こは大和
そらみつ
大和國原
いにしへの
光しづもる
大和國原

八雲なす
青垣山の
青によし
奈良の都や

みほとけの
神寂び在はす
伽藍七堂

うつせみの
身にしあればや
たまきはる
うちの限りは
かけまくも
あなあはれ
大和國原
そがほとり
春たけにけり

目次

序詩　三
その一
風鐸　四
五十鈴川　六
かへし　七
宇治川　八
法隆寺　一一
若草山　一二
三月堂　一四
僧房　一五
故郷塚　一八
芭蕉庵　二一
中宮寺
その二
春雪　二四
彼岸　二七
桃の節句　二九
郊外風景　三二
春　三五
入學試驗　三六
時計　四〇
墓前　四三
早春　四四
舞台裏　四六

指さき　四九
その三
山徑　五四
ある日　五六
思ひ出　五八
詩集風鐸　六〇

裝幀　五百旗頭欣一
跋文　大笹賢應
松村俊郎

その一

風鐸

春淺き風吹きくれば青錆びしその風鐸の
音をこそ聞かめ

五十鈴川

誰でもが
神代ながらの
波紋をつくつて
手を清めた

春あさい

山のすがたが
みんなの手から
ゆらめいて
いつた

流れるともなく
流れてゆく

五十鈴川。

かへし

五十鈴川きよき流れに影うつす山は
かなしも春たちにけり

宇治川

とけるがに雲一ひらの消えゆけばい
やひろごりて空青みたり

法隆寺

法隆寺にゆく
ながい道

うどん、めし、と書いてある
暖簾
永らくうどんにも

御無沙汰がほに

とほい
五重塔を
眺めてゐる

飛鳥

白鳳

天平と

しづかに古びた

この邊り

春は

白い風が吹きまくる

若草山

その圓ろきすがた愛なしも鳴く鹿の

若草山に君とのぼらむ

三月堂

見上げると
高いきざはしが
夕やみに消えてゐた

三月堂の
月を見ようと

友のほか
誰も居ない

ながい庇の奥ふかく

國寶不空羂索觀音も
この月を
見そなはして

僧房

春たけし
大和巡禮——
いにしへの僧房の
跡に行つ

門朽ちて

長かりけむ
土塀なく

ここに道説く人々の
きびしき日々も消えさりて

笹の葉
夕風に
ひとり
鳴り居ぬ

故郷塚

枯れた
芭蕉が
光に
ねむつてゐた
旅した人の一生を

枝さしのべて
白梅が
匂うて

しづかに
蹄音も聞えさうな

うしろは
竹藪だつた

芭蕉庵

しめきつた
茶室の戸を明けた

春の日がたまつてゐる
水屋だつた

小さな襖が　今にも開きさうに
またしめてあつた

留守宅をたづねたように
戸をしめれば

かへらない
旅路の人を弔つて

梅の花が

その垣根に
散つてゐた

中宮寺

いかるがの里の尼寺その塀によりそ
ふごとく白梅の咲けり

その二

春雪

とほい
人の聲が
さえざえと
ひゞいてくる
あした

何か
胸に
かへつてくるもの

思ひがけないことのように
雪が
ふつてゐる

ありとある
さまざまなものが

天に近づいてゆくように

白く

ひつそり

朝の茶を味はつてゐる

彼岸

何處か

杳い山の尾根を

死んだ人が

歩るいてゆくような

そんな

足音まで聞えさうな

しづかな
明るい午後

彼岸もちかく

窓邊の花が
一つの思ひのように
紅い

桃の節句

花の樹蔭に
やかた船を見てゐる——

そんな寫眞を
部屋に飾つた

白い襖に
臘梅が
影をそへてゐる
淡墨(うすずみ)の文字のように
けふ
桃の節句

何か
思ひ出しさうに
障子戸の日ざしが
さやぐ

郊外風景

木肌も白い
一軒の家が
春の日なかに
建つてゐる

風が吹けば

小さな音を
たてさうな硝子戸が
新らしい
その窓に
はまつてゐる

私の家のやうな
誰かの家
籬の庭に

雞が二羽
あるじ顔して
ならんで出て來た

春

春の陽は何も語らずうら庭の黒土の
上にこぼれ居たりぬ

入學試驗

誰かの
お父さんらしい人が
日向に蹋んで
新聞を見てゐる

試驗のはじまつてゐる

校庭の芝生には
うらうら若芽が
萠えてゐる

お父さんの新聞の
四角い影が
その上を
大切さうに
覆つてゐる

とほくに
白い校舎が
陽に輝やいて

この日まで
歩るいてきた

疲れ

ふと

立ち上つて
眼鏡を拭いてゐる

時計

火桶を抱へ

この燠のように
明るかつた
夜

聲もない
まどゐに
泛ぶ人びと

何處だらう

寂びた
時計の音がする

亡き數を

かぞへるように……

しん　として

闇に

沈丁花が

白い

墓　前

我がそゝぐ水も石肌つたはりて音なく土にしみ入りにけり

早春

誰も居ない
となりの部屋

障子が
ひつそり
しめきつてある

住みなれた家——
しみじみ眺めて

何か待つてゐるように

ともしびの下
ほのかに
白梅が匂つてくる

舞台裏

夕ぐれの
照明が

ホリゾーンに
美しく青い

幕の明いてゐる
舞台裏。

しんとした
ひとときに

何故か
自分を想つてゐる

ひぐらがしが鳴いて

靴音が
ときどき　軋しむ

壁にかかつた
提灯が
低い科白を
聞いてゐる

指さき

うすぐもり

すべてのものが
さびしく光る

お湯に入つて

ぬれた指さきを
眺めてゐる

秋風のたつ
高原のように

ぬるい湯で

何も知らぬ氣に
指さきは

旅の日を
かぞへてゐる

その三（散文）

山　徑

いつも私は胸の中に、一つの風景を持つてゐる。その風景は山徑である。一方は、はるか下の方に瀨の音が聞える溪流になつて居り、もう一方は懸崖になつて居て、徑はそれに沿つて消えてゐる。その徑には木の葉が一面に散りしいてゐる。夕日のような弱い逆光にその葉が一枚〳〵光つてゐる。もとより誰も居ない徑である。誰も居ない徑といふより、今しがた誰かが去つて了つた後のような、寂しい徑である。

私はこの山徑を、たとへば銀座の人通りの中でも、暗らい映畫館のなかででも、ふと思ひ浮べると、落葉を踏んで遠ざかつてゆくその人の足音に、ぢつと耳を澄ます。

私はふだん出不精のくせに旅行だけは好きだ。その好きな原因の一つには、このような私の風景を探しあてようとする無意識な氣持が働らいてゐるかも知れない。あるような風景でゐて、なか〳〵見つからない風景である。

何時の頃から、こんな風景を持つようになつたか、それもはつきりしない。たゞずつと以前、芭蕉の俳句に始めて接したとき、此の道やゆく人なしに秋の暮れ　といふ例の奥の細道の一句を見て、分らない乍らも詩に於いて、はじめて私の徑を見つけ得た喜びに浸つたことがある。私が詩らしいものをつくり始め、同時に芭蕉に關心を持ち出したのも此の頃であつたと思ふ。

私は、この一つの山徑にめぐりあふため、これからいつまで旅をつゞけてゆくことであらう。

ある日

私は特別な用事とか約束でもない限り滅多に日曜でも外へ出た事がない。朝から晩まで自分の部屋へ坐つてゐて、本を讀んでゐるか字を書いてゐる。字を書くといふ事は面白い事である。何の考へもなしに、ふと浮んだ字を紙に書いてみる。そして、じつとその字をみてゐると、そこから、いろ〳〵な思ひ出や空想が浮んでくる。その字のうちで、いつも無意識のうちによく書くのに、海といふ字がある。海といふ字を書くと、胸の中まで青く透きとほつたようになつて來る。折から窓の硝子戸が風にかすかな音でもたてようものなら、私は、松原の中に建つてゐる、小さい、一軒家を想ひ出す。その一軒家の一間に私が坐つてゐる。海から吹いてくる風が、松籟の音とともに、この窓硝子をゆすつてくる。外は明るい。その部屋も明るい。海の香りもしてくる。それなのに、何故私は一人だまつて本を讀んでゐるのだらう。ただこの小さい硝子戸のたてる音が、音樂のように、一つの世界となつて私の前にひろがつてゐる。私はその世界に、恍惚と夢みては、ふと、我にかへる。この詩集中の「郊外風景」もそんなときの氣持を、幾分でもあらはしたつもりである。

思ふことの現はせないもどかしさが、ずいぶんあるが。

さうして私は疲れたある日、私の部屋の隅をぼんやり眺めてゐた。白い陶器の花瓶に赤い花が活けてあつた。その後ろの壁には、さめかかつた壁紙が貼つてあつた。赤い花と壁紙、——その間には何も置いてなかつた。けれどその時、私は、ふと、その空間に私の小さかつた日を見た。私の小さい目で見た風景が、しづかにくり返へされてゐるのを見た。花と壁紙が何か昔の世界と同じものをつくつてゐたのであらう。しづかに目を閉じた。しびれてゆくように、私のからだは下へ落ちてゆく物体のように思へた……。突然、私は自分の意志でもなく、目をさました。何十年、何百年眠つてゐた人間が、ふと目をさましたように。私の目の前には始めて見るような花も、壁も、そして部屋も、自然においてあつた。

私のかうした生活に、俄に天降つて來た心が、私のなかに入つたように、何か新らしく生きようと、不思議にそんな考へが湧いた。

相變らず外は明るく、硝子戸は音をたてて居た。

思ひ出

誰の小説であつたか忘れたが、以前、夜おそく眠られぬまゝに寢てゐると、ふと隣りの部屋に低い咳の聲がして、燐寸を擦る音がした。そして鴨居の隙間から赤い火が、一瞬、天井の木目を照らし出して闇に消えた。それを見てゐると、不意に何も忘れて隣室の老父への愛情がひし〳〵と湧いて來て、子供のように涙で枕をぬらした、といふのを讀んで、今でも深く印象に殘つてゐる。

かうした、一寸したことが、さまざまな思ひ出や、ふかい感動を誘ふことは、しば〳〵ある。そして、さうした事がしば〳〵起る所に、私は人間同志の貴さを見る。私はそんな意味から、たとへば人間同志の一つの典型的な場合である戀愛を、映畫にでも小説にでも見るとき、その交はす言葉の意味内容より、無意識にする二人の動作を克明に模寫してある方が、何か私には深い感動を與へる。

世の中に處してゆく經驗が、比較的少いと思つてゐる私でも、夕方など一人部屋に坐つて、たとへば莫に火をつけやうとした瞬間など、思ひがけずに、ある人の顏とか、ある風景とか、又時によつては、ある時の、ある感情だけを切りはなして思ひ出す事がある。リルケの「記憶の再現」なども、こゝを云つてゐるのかも知れない。

私は東京で生れて東京で育つた故か、さうした時、思ひ出す風景は、いつも旅した日の田舍道とか高原とか深い山林が多い。そして大低の場合、それらの風景は、一旦思ひ出となつて、私のものとなつた以上は再び行きたいとも思はない。私はいつも自分と對象との間に距離を置いて、それを眺めて居たいのである。そして、ただ一瞬の記憶の再現を、いろ〳〵な時にたのしみたいのである。

考へれば、寂しい性質だと思ふけれど、私はその反面、自分の描いてゐる美しさを、その對象から裏切られないようにしたいからでもある。

詩集風鐸

印刷用紙の統制とともに、今年に入つて、また更に詩集の出版は難かしくなつた。が不思議なことに事實は反對で、むしろ今年に入つてからもう既に二三の上質の詩集が刊行されて來た。紙の豊富な時より、紙の少い時、かへつてその裝幀や用紙に氣を配ばる人間の心理を面白いと思ふ。尤も私自身も、さうした意味から、この詩集を私の處女詩集のつもりで出版した。

私は最近になつて、詩といふものは、作品そのものよりも、その作品をつくる人間の心が一番重要だと信じるようになつた。日本の藝道の第一歩が、先づその人間の修養にあるように、少くとも日本人として日本の詩をつくる上には、その作者の心が何事にも捉らはれない境地に入るように努力しなければならないと、私は或る先輩から云はれた。捉らはれない心だからこそ、花を見て純粋に美しいと感ぜられる。さう思つて、今まで私が、たとへば芭蕉に對して抱いて來た人間觀の淺薄だつたのに氣がついたのである。

もとより、今の私は人間としては、まだ未完成の、むしろ欠点の方が多い人間だと、これは決して遠慮でも謙遜でもなく思つてゐる。

ただ、そのような人間が書く詩とは、何う云ふものか、云ひかへれば私といふ人間と、私の詩との間に間隙があるだらうか、それが、私自身に分らない最も心配な事であつた。私にとつては、せめてその作品と人間との間に挾雜物をなくするのが、正直に心を表現するのが第一の努めだと思ふから。

その意味で、私はこの詩集に敢へて先輩の序文を頂かなかつた。さうした心配のあるうちは、ただ序文のみ頂くことが、先輩に對して失禮に當ると思つたからである。その代りに、私は親しい友に跋文を書いて貰ふことに——又私自身の詩以外の散文を二三篇入れる事にした。それは、前にも云つた如く、この詩集を、幸に讀んで下さる方々に、二三の角度から見た私を知つて頂くと共に、私の作品との間の一致不一致を、敎へて頂きたい爲である。

以上を以つて、私の、この詩集刊行の言葉に代へる。切に先輩諸家よりのきびしい御言葉を望んでゐる。

同じ著者によりて

詩集　さくら　詩文學研究會刊

跋

大笹賢應

松村俊郎

跋

大笹賢應

詩集「風鐸」は前の詩集「さくら」よりのち、この一年間の作品を輯めた澁澤さんの第二詩集である。「さくら」によつて、ゆたかな抒情詩人としてあらはれた氏は、その頃より數々の秀作逸品を世に問うてゐた。さうしてその頃より氏の思惟は一切西歐的なものから離脱し、東洋的日本的なものへ回歸しつゝあつたやうである。何時しか氏の側には古典、東洋思想や藝術の書籍が累積されるやうになり、「日本の詩」を確立せんとする努力がつねに續けられてゐた。詩風も無の深さをさぐり、寂びの探求にはしり、遠く万葉の詩情を究め、私はつねに傍で氏の努力に對して、時の勢をこえた、ひたむきのものを感じて何か尊嚴な氣さへしてゐた。

澁澤さんの詩人としての特性は詩の「美しさ」にあるのではないかと私は思つてゐる。眞實何でもないことが一たび氏の詩眼に彩られ、心情を濾過すると驚く程の美しさを現はす。自然、その他あらゆる現象を美化し淨化する作用、これこそ詩人に惠まれた天賦の特性ではあるまいか。さういふ意味で氏は最も詩人らしい詩人といふことが出來よう。澁澤

さんの秀れた天性はその人間性のゆたかさ――（それは私には氏をはぐくんだ環境によつてもたらされたところが多いやうに思はれる）――に依るらしい。

おほらかな詩性をもつ氏の作風は正に端倪すべからざるものがあつて、將來にどんな變化が齎らされるかは到底私などの臆測し得るといろではない。しかしながら私は信ずる。澁澤さんの詩の掌にとりたいほどのきれいさ、これだけは失はれないものであると。

氏は常に眞實が書きたいといふ。詩は書けても詩をもたぬ詩人になることをおそれてゐるのであらう。それあるかこれらの詩から人間としての氏がひし〳〵と感ぜられる。漸次人格と共にその詩は完成に近づき、追隨するものを遠く許さぬ日も遠からずくることだらう。

ともすれば詩のない詩の横行せんとするとき、このやうな詩人がゐるといふことは洵に心强いかぎりである。廣く江湖にこの詩集の迎へられむことをいのつてやまない。

この詩集の裝幀については、尊敬すべき詩友五百旗頭氏が藝術的良心をかたむけ、こんな立派なものにしていただいた。

末尾ながら私からも感謝の意を表する次第である。

跋に代へて

松村俊郎

この三月、澁澤君は私と伊賀、大和の古蹟を巡つた。私は前から一度澁澤君に私の鄕里へ來て欲しかつたのである。都會の生活に疲れてゐる君が、芭蕉の生誕地や、日本文化の發祥地であり佛敎美術の豊富な奈良を尋ねることは、何か新しい境地となぐさめを見出してくれるのではないかと思つたからである。

私と一緒だつた日數は約五日間の忙しいものであつたが、大和の有名なところは一わたり廻つたつもりである。

確か四日目であつたと記憶してゐるが、私達は大軌電車の尼ケ辻で降りて唐招提寺へ行く途中、少し廻り道をして菅原の喜光寺へ行つた。この寺は鎌倉時代に再建した丹塗りの金堂だけが黑松の林の中にひつそりと建つてゐた。私達は寺の枯芝に腰をおろして感慨にふけつて居た。松籟の音と共にかなしい風鐸が寂しさを訴へる樣に響いて來る。カラーン カラーン、と。

この古國大和の感じを澁澤君の力でどこまで深く表現してくれるかと期待して居たが、

君がこの詩集の計畫をもらしたとき「こんどの詩集の題は風鐸にした」と云ふのを聞いて私の案内も無駄ではなかつたと感じた。

又唐招提寺では何時もならば秘佛で拜觀できない鑑眞和尙の像を拜めた。天平の色そのまゝの和上の顏に微笑が見えて永久に眠つておはすこの佛を詩にならないものかと思つて居たが、この詩集にその鑑眞和尙の詩のないのが私にとつては實に心殘りである。この詩集に出なくて未だつくつて欲しいのは、月ケ瀨の觀梅行と藥師寺などであるが、追々と私に見せてくれることと期待してゐる。

私が友人の一人として澁澤君に望むことは、ゴミゴミした都會生活の病的な美をはなれて、君のその純情さをもつて單に大和の風物ばかりではなく、過去三千年續いて來たこの日本の國土の美しさに侵つて欲しい。たとへば三月堂のほの暗い堂内に、しみじみと雙手を合せて祈つてゐる女人月光菩薩の美しさのやうな——この素樸にして純粹な、そして自然的な日本美を探求してゆく道が君の詩を大成に導くのではないかと思ふ。

喜光寺の風鐸は今も人氣(ひとけ)のない古寺の庭に奏でて居ることであらう。この音(ね)のもつ「意味」を忘れないで斯道を精進されるやう澁澤君に望んでゐる。

詩集風鐸

昭和十八年八月二十日印刷納本
昭和十八年八月廿五日發行・著
作者東京都豊島區駒込一ノ十澁
澤　均・發行者東京都江戸川區
小松川三ノ六四千鳥方菅原道之
介・發行所仝春秋社・印刷者東
京都芝區櫻田備前町廿二垣本歡
三・印刷所同壽美禮商會印刷部

限定版貳百部

「風鐸」について

今度の詩集を出すに當つて、私は「風鐸とは何ですか」といふ質問を大分方々から受けました。成程考へてみると風鐸と突然云はれたのでは何の事だか分らないかとも思ひ、大體風鐸の事について、又卷中書き落としました、何故私が詩集を「風鐸」といふ名前にしたかと云ふことについて、簡單ながら附け加へて置きます。

最近上映された文化映畫、「法隆寺」をごらんになつた方は、大低御承知の事と思ひますが、大和の寺を見ますと、何處の寺にもその軒先に當る所に――恐らくこゝにも名稱があるのでせうが――銅製の風鈴のようなものが吊がつて居ます。これが風鐸だそうです。私自身、實は知らずに居て、友人に聞いた所さう敎へてくれたのです。

私は、大和の旅へ出まして、或る一日、喜光寺といふ所へ行きました。傾いてゆく春の日を浴びて、畠の中に置き忘れられたように、一つ古びてゐるみ寺でした。私はその境內に立つて、何とも云へない感慨に打たれて居ました。東大寺よりも、法隆寺よりも、私は人に知られずに寂び果てゝゆく、このみ寺の姿に、涙ぐましい程の愛着を感じて居りました。いつまでも〳〵も去り難い氣持でした。その時です。何處からともなく、幽かな〳〵音が聞えて來ました。それは子供の頃、晝寢の夢に聞いた風鈴のように、淡くも、もの悲しさを唆つて、手に捉らへられないほど遠くかと思へば、又すぐ身近い所の樣に韻いて來るのです。私は何處で鳴つてゐるのだらうと、思はず周圍を見廻しました。だが、友のほか誰も居ず、寂びたみ寺の他何もありませんでした。又一つ、幽かに鳴りました、それは空から韻いてくる樣にも思へました。私はふと上を見上げました。そして目に映つたのが、朽ちた軒の四隅に吊がつてゐる風鐸でした。私は息も止まる思ひで、千餘年の昔ながらを今に傳へて幽かに鳴りひゞくその風鐸の音に、じつと耳を傾けました。青錆びた風鐸が、春淺い風を受けて、鳴つてゐる、といふ事だけでも私には何か深い象徵とも思へて、更に胸を打たれるのでした。

その時から、私は詩集の名を「風鐸」と心に決めました。

私の恐らく祖國に於いて最後になるかもしれない大和紀行を記念するため。

私の人生に、いつまでもあの靜かな風鐸の音を響かせるために。

そして最後に私は、これを讀んで下さる方々と共に、とほく萬葉の昔、戀のために沒我の精神に生きた子孫として、今、祖國の爲に同じ沒我の精神を捧げてゐる、日本民族の悲壯な美しさを讃へ、この「大和し美はし」の大悲願の境に殉じてゆかむ道に榮光あらんことを祈つて居ります。

昭和十八年七月二十日

自宅にて

澁澤　均しるす